イ 歌廿二〇一二
ロ 歌八〇三
ハ 歌三〇五、八〇四
ニ 歌二〇十七
ホ 歌二〇十三
ヘ 歌二〇十
ト 歌八〇十三
チ 詩八十〇十三　結十三〇四
リ 歌六〇三、七〇十
ヌ 歌四〇六
ル 歌三〇九、八〇十四
イ 歌廿六〇九

第二章

一 われいシャロンの野花、谷の百合花なり○ 二 女子等の中にわが佳耦のあるい荊棘の中に百合花のあるごとし○ 三 わが愛する者の男子等の中にあるい林の樹の中に林檎のあるごとし、我ふかく喜こびてその蔭にすわれり、その實いわが口に甘かりき 四 彼われをたづさへて酒宴の室にいれたまへり、その我上にひるがへしたる旗い愛なりき 五 請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ林檎をもて我に力をつけよ、我い愛によりて疾わづらふ 六 かれが左の手いわが頭の下にあり、その右の手をもて我を抱く 七 エルサレムの女子等よ我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ、愛のおのづから起るときまでい殊更に喚起し且つ醒すなかれ○ 八 わが愛する者の聲きこゆ、視よ、山をとび、岡を躍りこえて來たる 九 わが愛する者い獐のごとくまた小鹿のごとし、視よ彼われらの壁のうしろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ 十 わが愛する者われに語りて言ふ、わが佳耦よ、わが美はしき者よ、起ていできたれ 十一 視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみてはやさりぬ 十二 もろ〳〵の花い地にあらはれ、鳥のさへづる時すでに至り、班鳩の聲われらの地にきこゆ 十三 無花果樹いその青き果を赤らめ、葡萄の樹い花さきてその馨はしき香氣をはなつ、わが佳耦よ、わが美しき者よ、起て出きたれ 十四 磐間にをり、斷崖の匿處にをるわが鴿よ、われになんぢの面を見させよ、なんぢの聲をきかせめよ、なんぢの聲い愛らしく、なんぢの面いうるはし 十五 われらのために狐をとらへよ、彼の葡萄園をこそこぼつ小狐をとらへよ、我儕の葡萄園い花盛なれば なり 十六 わが愛する者ぞ我につき我いかれにつく、彼い百合花の中にその群を牧ふ 十七 わが愛する者よ、日の涼しくなるまで、影の消るまで身をかへして出ゆき、荒き山々の上にありて獐のごとく、小鹿のごとくせよ

第三章

一 夜わが床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず 二 我おもへらく今おきて邑

ロ 歌九〇七
ハ 歌二〇七、八〇四
ニ 歌八〇五
ホ 歌六〇五
ヘ 歌六〇六
ト 歌六〇七
チ 歌七〇四
リ 歌五〇十九　歌七〇三
ヌ 歌二〇十七

をまたりありき、わが心の愛するものを街衢あるひい大路にてたづねんと、乃ちこれを尋ねたれども得さりき 三 邑をまたりありく夜巡者らわれに遇ければ汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ 四 これに別れて過ゆき間もなくわが心の愛する者に遇たれば之をひきとめて放さず、遂にわが母の家にともおひゆき、我を產し者の室にいりぬ 五 エルサレムの女子等よ、我おんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ、愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ○ 六 この汝乳香なる商人のもろ〳〵の薫物をもて身をかをらせ、煙の柱のごとくして荒野より來る者い誰ぞや 七 視よ、こいソロモンの乘輿にして、勇士六十人その周圍にあり、イスラエルの勇士なり 八 みな刀劍を執り、戰鬪を善す、各人腰に刀劍を帶て夜の警誡に備ふ 九 ソロモン王レバノンの木をもて己のために輿をつくれり 十 その柱い白銀、その欄杆い黃金、その座い紫色にて作り、その內部にいイスラエルの女子等ご愛をもて繡たる物を張つく 十一 シオンの女子等よ、出きたりてソロモン王を見よ、かれい婚姻の日、心の喜こべる日にその母の己にかうぶらせし冠冕を戴だけり

第四章

一 あゝなんぢ美はしきかな、わが佳耦よ、あゝおんぢうるはしきかな、おんぢの目い面帕のうしろにありて鴿のごとし、なんぢの髮いギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり 二 なんぢの齒い毛を剪たる牝羊の浴場より出たるごとしおの〳〵雙子をうみてひとつも子おきものいなし 三 なんぢの唇い紅色の線紐のごとく、その口い美はし、おんぢの頰い面帕のうしろにありて柘榴の半片に似たり 四 なんぢの頸項い武器庫にとて建たるダビデの戍樓のごとし、その上にい一千の盾を懸つらぬ、みな勇士の大楯おり 五 おんぢの兩乳房い牝獐の雙子おる二箇の小鹿ご百合花の中に草はみをるに似たり 六 日の涼しくなるま

リ 申五〇廿七
ヌ 申三〇九
ル 歌一〇二
チ 箴廿四〇十三、十四　歌五〇一
ワ 申廿七〇廿七　歌十四〇六、七

で、影の消るまでわれ沒藥の山また乳香の岡に行べし　七 わが佳耦よ、なんぢいことごとくうるはしくして
すてしのきずもなし○　八 新婦よ、レバノンより我にともにきたれ、レバノンより我とともに來れ、アマナの巔
セニルまたヘルモンの巔より望み、獅子の穴また豹の山より望め　九 わが妹わが新婦よなんぢいわが心を
奪へり、なんぢい只一目をもてまた頸玉の一をもてわが心をうむへり　十 わが妹わが新婦よ、なんぢの愛い
樂しきかな、なんぢの愛い酒よりも遙にすぐれ、なんぢの香膏の馨い一切の香物よりもすぐれたり　十一 新婦
よなんぢの唇い蜜を滴らす、なんぢの舌の底にい蜜と乳とあり、なんぢの衣裳の香氣いレバノンの香氣の
ごとし　十二 わが妹わがはなよめよ、なんぢい閉たる園、閉たる水源、封じたる泉水のごとし　十三 なんぢの園の
中に生いづる者い柘榴およびもろ〳〵の佳果またコペル及びナルダの草　十四 ナルダ、番紅花、菖蒲、桂枝さ
まざまの乳香の木および沒藥、蘆薈一切の貴とき香物なり　十五 なんぢい園の泉水、活る水の井、レバノンよ
りいづる流水なり○　十六 北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を吹てうの香氣を揚よ、ねがはくいわが愛する者
のおのが園にいりきたりてうの佳き果を食むことを

第五章

一 イ わが妹わがはなよめよ、我いわが園にいり、わが沒藥と薰物とを採り、わが蜜房と蜜とを食ひ
わが酒とわが乳とを飲り、わが伴侶等よ、請ふ食へ、わが愛する人々よ、請ふ飲あけよ○　二 われい睡りたれ
ともわが心い醒めたり、時にわが愛する者の聲あり即はち門をたゝきていふ、わが妹わが佳耦、わが鴿、わ
が完きものよ、わをのために開け、わが首にい露滿ち、わが髮の毛おい夜の點滴みてりと　三 われすでにわ
が衣服を脫り、いかでまた着るべき、已にわが足をあらへり、いかでまた汚すべき　四 わが愛する者戶の穴
より手をさしいれしかばわが心かれのためにうごきたり　五 やがて起いでゝわが愛する者の爲に開かんと

ホ 歌三〇一
ヘ 歌三〇二
ト 歌一〇八
チ 歌一〇十五、四〇一
イ 歌一〇八
ロ 歌二〇十六、七〇十

せしとき沒藥わが手より沒藥の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにおたゝれり　六 我わが愛する者
の爲に開きしにわが愛する者い已に退き去ぬ、ささにうの物いひし時いわが心さわぎたり、我かれをたづ
ねたれども遇ず、呼たれども答應なかりき　七 邑をまたりありく夜巡者等われを見てうちて傷つけ、石垣を
まもる者らいわが上衣をはぎとれり　八 エルサレムの女子等よ、我おんぢらにかたく請ふもしわが愛する
者にあむ汝ら何とこれにつぐべきや、我愛によりて疾わづらふと告よ○　九 おんぢれ愛する者い別の人
の愛する者に何の勝れるところありや、婦女の中のいと美はしき者よ、なんぢが愛する者い別の人の愛す
る者に何の勝れるところありて斯われらに固く請ふや○　十 わが愛する者い白くかつ紅にして萬人の上に
越ゆ　十一 うの頭の純金のごとく、うの髮いふさやかにして黑きこと烏のごとし　十二 うの目い谷川の水のほと
りにをる鴿のごとく、乳にて洗はれて美はしく嵌れり　十三 うの頰い馨しき花の床のごとく、香草の壇のごと
し、うの唇い百合花のごとくにして沒藥の汁をおたゝらす　十四 うの手いきむみたる碧玉を嵌し黃金の釧の
ごとく、其躰い青玉をもておほひたる象牙の雕刻物のごとし　十五 うの脛い巖石の柱を黃金の臺にたてたる
がごとく、うの相貌いレバノンのごとく、うの優れたるさまい香柏のごとし　十六 うの口いはなはだ甘く誠に
彼にい一つだにうつくしからぬ所おし。エルサレムの女子等よ、これぞ我がわが愛する者、これぞわが伴侶お
る

第六章

一 婦人のいと美はしきものよ、汝の愛する者い何處へゆきしや、なんぢの愛する者いづこへお
もむきしや、われら汝とともにたづねん○　二 わが愛するものい已の園にくだり、香しき花の床にゆき、園
の中にて群を牧ひ、また百合花を採る　三 我いわが愛する者につき、わが愛する者いわをにつく、彼い百合

ハ 歌六〇十
ニ 歌四〇一
ホ 歌四〇二
ヘ 歌四〇三
ト 歌六〇四
チ 歌七〇十二

花の中にてうの群を牧ふ○ 四 わが佳耦よ、なんぢい美はしきことテルザのごとく、華やかなることエルサレムのごとく畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし 五 なんぢの目い我をおそれしむ、請ふ我よりはなれしめよ、なんぢの髪いギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり 六 なんぢの齒い毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとしおのゝ雙子をうみてひとつも子なきものいなし 七 なんぢの頰い面帕の後にありて柘榴の半片に似たり 八 后六十人妃嬪八十人、數えられぬ處女あり 九 わが鴿わゞの完き者いたゞ一人のみ。彼いうの母の獨子にして產たる者の喜ぶところの者なり。女子等い彼を見て幸福なる者ととなへ、后等妃嬪等い彼を見て讚む 十 この晨光のごとくに見へわたり、月のごとくに美はしく、日のごとくに輝やき畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき者い誰ぞや○ 十一 われ胡桃の園にくだりゆき谷の青き草木を見葡萄や芽し〻柘榴の花や咲しと見回しをりしに 十二 意ものず知ず我ゞの心わををしてわゞの貴とき民の車の中間にあらしむ○ 十三 歸れ歸れシユラミの婦よ、歸れ歸れ、われら汝を觀んことをねがふ○なんぢら何とてマハナイムの跳舞を觀るごとくにシユラミの婦を觀んとねがふや

第八章

一 君の女よ、なんぢの足い鞋の中にありて如何に美はしきかな、汝の腿いまろらかにして玉のごとく、巧匠の手にて作りたるごとし 二 なんぢの臍い美酒の缺ることあらざる圓き杯盤のごとく、なんぢの腹い積かさねたる麥のまゝりを百合花もてかこめるゞ如し 三 なんぢの兩乳房い牝鹿の雙子おゝ二の小鹿のごとし 四 なんぢの頸い象牙の戍樓の如く、汝の目いヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく、なんぢの鼻いダマスコに對へるレバノンの戍樓のごとし 五 なんぢの頭いカルメルのごとく、なんぢの頭の髮い紫色のごとし、王うの垂たる髮につなゞれたり 六 あゝ愛よ、もろ〻の快樂の中にありて

ニ 歌二〇十六、六〇三
ホ 詩四十五〇十一
ヘ 歌六〇十一
ト 創世〇十四
チ 太十三〇五十二

なんぢい如何に美はしく如何に悅ばしき者なるかな 七 おんぢの身の長い棕櫚の樹に等しく、なんぢの乳房い葡萄のふさのごとし 八 われ謂ふこの棕櫚の樹にのぼり、うの枝に執つかんと、おんぢの乳房い葡萄のふさのごとく、なんぢの鼻の氣息い林檎のごとく匂はん 九 なんぢの口い美酒のごとし、わが愛する者のために滑かに流れくだり、睡れる者の口をして動かしむ○ 十 われいわゞ愛する者につき、彼いわをを戀ふたふ 十一 わゞ愛する者よ、わをら田舍にくだり、村里に宿らん 十二 わをら夙におきて葡萄や芽し〻苔やいでし柘榴の花やさきしいざ葡萄園にゆきて見ん、かしこにて我わが愛をなんぢにあたへん 十三 戀茄かぐはしき香氣を發ちもろ〻の佳き果物古き新らしき其にわゞ戶の上にあり、わゞ愛する者よ我これをおんぢのためにたくゝへたり

一 ねゞのゝくい汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくおらんことを、われ戶外にてなんぢに遇ふとき接吻せん、然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ 二 われ汝をひきてわゞ母の家にいたり汝より敎誨をうけん、我かぐはしき酒柘榴のあまき汁をなんぢに飲ましめん 三 かれが左の手いわが頭の下にあり、うの右の手をもて我を抱く 四 エルサレムの女子等よ、我なんぢ等に誓ひて請ふ愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒ずなかれ○ 五 おのれの愛する者に倚かゝりて荒野より上りきたる者い誰ぞや○林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり、なんぢの母かしこにて汝のために劬勞をおし、おんぢを產し者かしこにて劬勞をなしぬ○ 六 われを汝の心におきて印のおとくし、おんぢの腕におきて印のごとくせよ、其い愛い强くして死のごとく、嫉妬い堅くして陰府にひとし、うの焰い火のほのほのごとしともはげしき焰おり 七 愛い大水も消ことあたはず、洪水も溺らすことあたはず、人うの家の一切の物をこ

イ 箴九〇二
ロ 歌二〇六
ハ 歌二〇七、三〇五
ニ 歌三〇六
ホ 賽四十九〇十六、耶廿二〇廿四、哀二〇廿三
ヘ 箴六〇廿五

ト　詩廿三〇卅三

チ　太廿一〇卅三

リ　歌二〇十四

ヌ　詩廿二〇十七、廿

ル　歌二〇十七

と〳〵く與へて愛に換んとするとも尙いやしめらるべし○ 八 われら小さき妹子あり、未だ乳房あらず、われらの妹子の問聘をうくる日にい之に何をおしてあたへんや 九 かれもし石垣ならんにい我ら白銀の城をうの上にたてん、彼もし戸おらんにい香柏の板をもてこれを圍まん○ 十 われい石垣わが乳房い戍樓のごとし是をもてわれい情をかうむる者のごとく彼の目の前にありき 十一 バアルハモンにソロモン葡萄園をもてり、これをうの守る者等にわづけおき、彼等をしておの〳〵銀一千をうの果のために納めしむ 十二 われ自らの有なる葡萄園わをの手にありソロモンおんぢい一千を獲よ、うの果をまもる者も二百を獲べし○ 十三 なんぢ園の中に住む者よ、伴侶等なんぢの聲に耳をかたむく、請ふ我にこを聽ゑめよ○ 十四 わゴの愛する者よ、請ふ急ぎはしき、香はしき山々の上わありて獐のごとく、小鹿のごとくあを

雅歌　終

イ　民十二〇六
ロ　申廿三〇一、耶二〇十二、六〇十九、廿二〇廿九、詩廿六〇四
ハ　箴五〇一二
ニ　耶八〇七
ホ　耶九〇三六
ヘ　箴五〇十二
ト　箴五十七〇三四　太三〇七
チ　箴九〇十三　耶二〇廿一五〇三
リ　耶八〇廿二
ヌ　申廿八〇五十一五十二
ル　伯廿七〇十八　哀二〇六
チ　耶四〇十七
ワ　哀三〇廿二　羅九〇廿九
カ　創十九〇廿四
ヨ　申廿二〇卅二　詩十六〇四十六
タ　母上十五〇廿二　詩五十〇八九、五十一〇十六、箴十五〇八、廿一〇廿七、賢六十六〇三一　耶六〇廿一七〇廿一〇廿六〇廿一、廿二、來六〇七
レ　出廿三〇十七、申四〇廿三
ソ　太十五〇九
ツ　耳二〇十四、二〇十五

以賽亞書

第一章

一 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサレムとに係る異象 二 天よきけ地よ耳をかたぶけよ、ヱホバの語りたまふ言あり曰く、われ子をやしなひ育てしにかれらい我にろむけり 三 牛いろの主を知り驢馬いろのあるじの廐を知る、然どイスラエルい識ず、わが民いさとらず 四 あゝ罪孼をかせる國人、よこしまを負ふたみ、惡をおす者のすゑ、壞りろこおふ種族、かれらいヱホバをすて、イスラエルの聖者をあおぎり、之をうとみて退きたり 五 おんぢら何ぞかさねぞさね悖りて猶撻れんとするか、うの頭いやまざる所おく、うの心いつかれはてたり 六 足のうらより頭にいたるまで全きところなく、たゞ創痍と打傷と腫物とのみなり、而してこれを合すものおく包むものおく、亦あぶらにて軟らぐる者もおし 七 おんぢらの國いあれすたれなんぢらの諸邑い火にてやかれ、おんぢらの田畑いろの前にて外人にのまれ、既にあだし人にくつがへされて荒廢れたり 八 シオンの女いぶだう園のゝ廬のごとく、瓜田の假舍のごとく、また圍をうけたる城のごとく唯ひとり遺れり 九 萬軍のヱホバわれらに少しの遺をとゞめ給ふことなくば我儕いソドムのごとく又ゴモラに同じかりしあらん○ 十 なんぢらソドムの有司よヱホバの言をきけ、なんぢらゴモラの民よ、われらの神の律法に耳をかたぶけよ 十一 ヱホバ言たまはく、なんぢらが獻るおほくの犧牲いわれに何の益あらんや我いをひつじの燔祭とこえたるけものゝ膏とにあけり、われい牡牛あるひい小羊あるひい牡山羊の血をよろこばず 十二 なんぢらい我に見えんとてきたる、このことを誰がなんぢらに要めしや徒らにわが庭をふむのみなり 十三 むなしき祭物をふたたび携ふることなかれ、燻物いわがにくむところ、新月および安息日また會衆をよびあつむることも我が

子 民廿八〇十一
ナ 利廿三〇二 哀二〇六
ラ 箴四十二〇廿四
ム 箴一〇廿八 詩百卅四〇二 伯廿七〇九
ウ 詩六十九〇十二 箴三〇四 耶十四〇十二 箴五十九〇二
ヰ 箴五十九〇三
ノ 耶四〇十四
オ 詩卅四〇十四、卅七〇廿七 詩五〇十五
ク 耶廿二〇三十六 箴六〇八
ヤ 箴四十三〇廿六、箴六〇二
マ 詩五十一〇七 箴七〇十四
ケ 箴廿三〇十九 多二〇二
フ 耶二〇廿一
コ 耶六〇卅 詩廿二〇十八、十九
エ 何九〇十五
テ 箴廿九〇廿四
ア 耶廿二〇十七 詩廿二〇十
二 何四〇十八 箴三〇十
サ 耶五〇廿八 亞七〇十
キ 申廿八〇六十三 詩五〇十三
ユ 耶六〇廿九、九〇七 馬三〇三
メ 耶卅三〇七
ミ 亞八〇三
シ 伯卅一〇三 詩一〇六、五〇六、七十三〇廿七、九十二〇九、百四〇卅五
ヒ 箴六十五〇三、六十六〇十七
ヒ 箴五十七〇五

にくむところあり、なんぢらい聖會に惡を兼ぬ。われ容すにたへず　十四　わが心いなんぢらの新月と節會とをきらう是わゞ重荷なり。われ負にうみたり　十五　我なんぢらゞ手をのぶるとき目をおほひ汝等ゞおほくの祈禱をなすときも聞ことをせじ。なんぢらの手にい血みちたり　十六　なんぢら己をあらひ己をきよくし、わが眼前よりうの惡業をさり、惡をおこなふことを止め　善をおこなふことをおらひ、公平をもとめ、虐げらるる者をたすけ、孤子に公平をおこなひ、寡婦の訟をあげつらへ○　十八　ヱホバいひたまはく、率われらともに論らむん、なんぢらの罪い緋のごとくなるも雪のごとく白くなり、紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん　十九　若なんぢら肯ひ去たがむゞ地の美產をくらふことを得べし　二十　もし汝等こばみうむかゞ劒にのまるべし、此いヱホバうの御口よりかたりたまへるなり　二一　忠信なりし邑いかにして妓女といわれる、昔しい公平にてみち、正義うの中にやどりしに今い人をころす者ばかりとなりぬ　二二　なんぢらの白銀い滓となり、なんぢの葡萄酒い水をまじへ　二三　なんぢの長輩いうむきて盜人の伴侶となり、おの〳〵賄賂をよろこび、贓財をおひもとめ、孤子に公平をおこなはず、寡婦の訟いかれらの前にいづること能はず○　二四　このゆゑに主萬軍のヱホバイスラエルの全能者のたまはく、咲われ敵にむかひて念をはらし仇にむかひて報をすべし　二五　我また手をなんぢの上にうへ、なんぢの滓をことゞく淨くし、なんぢの鉛をすべて取去り　二六　なんぢの審士を舊のごとく、なんぢの議官を始のごとくに復すべし、然るのちなんぢい正義の邑忠信の邑ととなへられん　二七　シオンい公平をもてわがおはれ、歸るものも正義をもて贖はるべし　二八　されど惡徒をかすものと罪人とともに敗れ、ヱホバをすつる者もまた亡びうせん　二九　なんぢらいうの喜びたる檉樹によりて恥をいだき、うのえらびたる園によりて恥赧むべし　三十　なんぢらい葉のかるゝ檉樹のごとく、水おき園のごとくあらん　三一　權勢ゆるものい麻のごとく、うの工い火花のごとく、二つのもの一同もえてこれを撲滅すものあし

第二章

一　アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかゝる言　二　すゑの日にヱホバの家の山いもろ〳〵の山のいたゞきに堅立ち、もろ〳〵の嶺よりもたかく擧り、すべての國い流のごとく之につかん　三　おほくの民ゆきて相語いはん、率われらヱホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道筩をしへ給へん、われらうの路をあゆむべしと、うい法律いシオンよりいでヱホバの言いエルサレムより出べければなり　四　ヱホバいもろ〳〵の國のあひだを鞫き、おほくの民をせめたまはん、斯てかれらうの劍をうちかへて鋤とおし、うの鎗をうちかへて鎌とおし、國い國にむかひて劍をあげず、戰鬪のことを再びまなばざるべし○　五　ヤコブの家よ、きたれ我儕ヱホバの光にあゆまん　六　主よなんぢいその民ヤコブの家をすてたまへり、此いかれらのおかに東のかたの風俗みち、皆ペリシテ人のごとく陰陽師となり、異邦人のともがらと手をうちて盟をたてしゞ故なり　七　かれらの國にい黃金白銀みちて財寶の數かぎりなし、かれらの國にい馬みちて戰車のかず限りおし　八　かれらの國にい偶像みち、昔おのが手の工その指のつくれる者筩をゞめり　九　嚔しきものい屈めらる、尊きものい卑せらる、かれらを容したまふなかれ　十　あんぢ岩間にいり、また土にかくれてヱホバの畏るべき容貌とうの稜威の光輝とをさくべし　十一　この日にい目をあげて高ぶるもの卑せられ、驕る人かゞめられ、唯ヱホバのみ高くあげられ給はん　十二　うい萬軍のヱホバの一の日あり、すべて高ぶる者おごる者みづからを崇るもの之上にのゞみて之をひくくし　十三　またレバノンのたかく聳たるすべての香柏バシャンのすべての檉樹　十四　もろ〳〵の高山もろ〳〵の聳えたる嶺すべて

モ 結卅二〇廿一
セ 箴四十二〇十七
イ 創四十九〇一 耶廿三〇廿
ロ 詩六十八〇十五、十六
ハ 詩七十二〇八 箴廿七〇十三
ニ 箴四〇一
ホ 耶卅一〇六、五十〇五 亞八〇十一、廿二
ヘ 路廿四〇四十七
ト 詩四十六〇九 何二〇十八 亞九〇十
チ 詩七十二〇三七
リ 耶五〇八
メ 民廿三〇七
ル 申十八〇十四
チ 詩百六〇卅五 耶十〇二
ワ 申十七〇十六、十七
カ 耶二〇廿八
ヨ 箴二〇十九、廿一 詩六〇十五
タ 箴四〇一十一〇十十一、十二〇十四、廿四〇廿一、廿五〇九、廿六〇一、廿七〇十二、廿八〇五、廿九〇十八、耶卅八〇十四、十九、卅九〇十一、廿何二〇十六、十八〇廿一、耳三〇十八 箴九〇十一 阿八 箴四〇六 箴九〇十六
レ 箴二〇十七、五〇十五、十六、十三〇十一
ソ 箴十四〇八、卅七〇廿四
ツ 結卅一〇三 亞十一〇十二 箴卅〇十五

のたかき樓すべての堅固なる石垣　十七　およびタルシ、のすべての舟すべての幕ふべき美はしきものに臨むべし　十八　この日にい高ぶる者いかゞめられ、驕る人いひくゝせられ、唯ヱホバのみ高くあげられ給はん　十九　かくて偶像いことゝ〳〵く亡びうすべし　二十　ヱホバたちて地を震動したまふとき人々うのおろるべき容貌とうの稜威の光輝とをさけて巖の洞と地の穴とにいらん　二十一　うの日人々おのが拜せんとて造れる白銀のぐうざうと黃金のぐうざうとを鼴鼠のあな蝙蝠の穴になげすて　二十二　岩々の隙けはしき山畝にいりヱホバの起て地をふるひうごかしたまふうの畏るべき容貌と稜威のかゞやきとを避んとす　二十三　おんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ、斯るものい何ぞかゞふるに足らん

第四章

一　みよ主ばんぐんのヱホバエルサレムおよびユダの粗むところ倚ところなる、凡てうの賴むところの糧、すべてうの賴むところの水　二　勇士、戰士、審士、預言者、卜筮者、長老　三　五十人の首、貴顯者、議官、藝に長たる者および言語たくみおるものを除去りたまはん　四　わを童子をもてかをらの君とし、嬰兒にかれらを治めしめん　五　民たがひに相虐げ、人おの〳〵うの隣を去へたげ、童子い老たる者にむかひて高ぶり、賤しきものい貴きものに對ひてたかぶらん　六　うのとき人ちゝの家にて兄弟にすがりていはん、汝なほ衣あり、われらの有司となりてこの荒敗をうの手にてをさめよと　七　うの日かれ聲をあげていはん、我おんぢらを愈すものとなるを得じ、わが家に糧おくまた衣おし我をたてゝ民の有司とすることおかれと　八　是かれらの舌と行爲といみおヱホバにろむきてうの榮光の目戮をかしゝごの故にエルサレムい敗れユダい仆れたればおり　九　かれらの面色いうの惡きことの證をおし、ソドムのごとくうの罪をあらはして隱すことをせざるおり、かれらの靈魂いわざはひおるかお自らうの惡の報をとれり　十　なんぢら義人にいへ、かならず

イ 利世六〇世六
ロ 王下世四〇十四
ハ 傳十〇十六

ニ 來三〇十二
ホ 創十三〇十三、十八〇世、世一、十九〇五
ヘ 傳八〇十二

禮祖をうけんと、彼等いうのおこおひの實をくらふべけれゞなり　十一　惡者いわざはひおる哉かおらず災禍をうけん、うの手の報きたるべけきゞなり○　十二　わが民いをさなごに虐げられ婦女にをさめらる、咲わゞ民よ、おんぢを導くものい反ておんぢを迷はせ汝のゆくべき途を絶つ　十三　ヱホバ立いでゝ公理をのべ起てもろもろの民を審判たまふ　十四　ヱホバ來りておのゞ民の長老ともろ〳〵の君とをさばきて言給はん、おんぢらい葡萄園をくひあらせり、貧きものより掠めとりたる物いおんぢらの家にあり　十五　いかなれゞ汝等わが民をふみにじり貧きものゝ面をすりくだくやと、これ主萬軍のヱホバのみことばおり○　十六　ヱホバまた言給はくシオンの女輩いおごり、項をのばしてあるき眼にて媚をおくり徐々としてわゆみゆく、うの足にいりん〳〵と音あり　十七　このゆゑに主シオンのむすめらの頭をかぶろにし、ヱホバかれらの醜所をあらはし給はん　十八　うの日主かれらゞの足にかざれる美はしき釧をとり瓔珞、半月飾、耳環、手釧、面帕　華冠、脛飾、紳、香盒、符囊　二一　指環、鼻環　二二　公服、上衣、外帔、金囊　二三　鏡、細布の衣、首帕、被衣おゞを取除きたまはん　二四　而して馨はしき香いかはりて臭穢とおり、紳いかはりて繩とおり、美はしく編たる髮いかぶろとおり華かおる衣いかはりて麁布のころもとなり、麗顏いかはりて烙鐵せられたる痕とおらん　二五　おんぢの男いつるぎにたふれ、なんぢの勇士いたゝかひに仆るべし　二六　うの門いあげきかおしみ、シオンい荒廢れて地にすわらん

第四章

一　うの日七人のをんな一人の男にすがりていはん、我儕おのれの糧をくらひ已のころもを着るべし、たゞ我儕になんぢの名をとおふることを許してわれらの恥をとりのゞけと○　二　うの日ヱホバの枝いさかえて輝かん、地よりなりいづるものゝ實いすぐれ並うるはしくして逃れのこれるイスラエルの益

ト 詩百世八〇二
チ 傳八〇十三

リ 賽三〇四
ヌ 賽九〇十六
ル 來六〇二

ヲ 賽五十八〇四　來三〇二、三

カ 申世八〇世七
ヨ 詩四十七〇三三
タ 士八〇世一

レ 賽世二〇十二、來一〇十五

ソ 耶十四〇二、哀一〇四
ツ 哀二〇十

イ 賽二〇十一、十七
ロ 撒後三〇十二
ハ 耶世三〇五、亞三〇八、六
ニ 耶世三〇十二、